

Title	第1回：中城村立津覇小学校と地域の連携について
Author(s)	-
Citation	地域にとって学校とは・学校にとって地域とは？ - 地域再生と教育再生の相互作用 - : 7-24
Issue Date	2012-02-23
URL	http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/25796
Rights	

第 1 章 県内事例聴き取り調査

第 1 回：中城村立津覇小学校と地域の連携について

第 2 回：南風原町の小中学校と地域の連携について

第 3 回：那覇市立真地小学校と繁多川公民館の連携について

第 4 回：今帰仁村歴史文化センターと地元学校の連携について

第 5 回：「ミントウンの会」（南城市）と地元学校の連携について

第 6 回：西原町立西原中学校と「CAT西原」の連携について

第 1 回：中城村立津覇小学校と地域の連携について

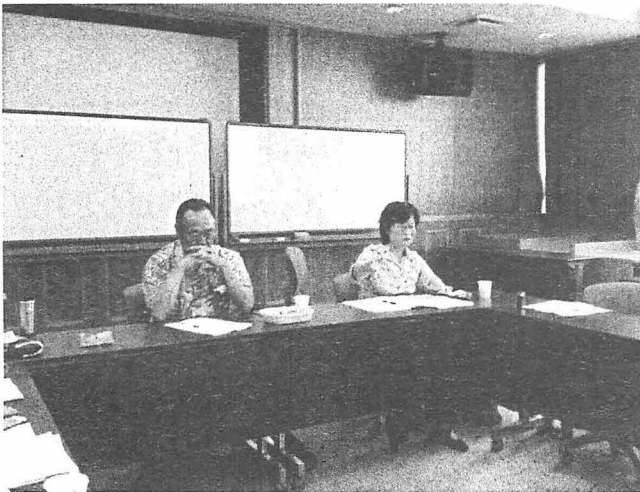
と き：平成 23 年 5 月 14 日（土）10：00～12：00

場 所：琉球大学 文系総合研究棟 703

講 師：宮城 直子氏（前中城村立津覇小学校校長、現西原町立西原小学校校長）

仲座 勇氏（中城村議会議員）

調査員：14 名（島袋純、佐藤学、新垣光栄、大宜見洋文、大城武秀、太田浩一、嘉数学、照屋勉、濱里正史、前城充、宮地順子、宮里大八、糸数温子、中村任子）



▲左から仲座氏、宮城氏



▲聴き取りの様子

（敬省略）

島 袋：今日は本当にどうもありがとうございます。まず、沖縄自治研究会の近年の研究と今回の研究の目的、これをお伝えして、それからご協力していただきたいと思います。

一昨年、「沖縄の自治会」をテーマに取り組んでいます。自治会には、「ユイマール」とか「共同体」というフレーズがあるんですが、実を言うと本島中南部の自治会はほぼボロボロです。すさまじい形骸化です。特にお金のある自治会は新規住民を自治会に入れず、軍用地料の上がりやを分配しないとか、そういう問題が多くて、非常に沖縄の地域の方々の結びつきが弱まっているということが、2年前の調査研究でよく分かりました。

昨年は、「新しい公共」「NPO」ということで、新しい市民組織、市民団体、こういったものが上手く機能しているのか、ということで調査を実施しました。上手く機能しているというのは、上手く地域の方々と結びつきあっている、自治体と上手く協力関係を結んでいるかということ。「新しい公共」とはどのようなものなのかということを見たんですけど、確かに NPO とか市民的な活動の団体は、新しい住民の方々が、提供する側にもサービスを受け取る側にも非常に多くて、そういった方々の受け入れ先になっているというようなことが分かりました。しかし、それらと自治体が上手く結びつきあっているという状況は、まだあまりない。特に問題なのは、自治体の職員とそういった「新しい公共」を担う NPO の方々との関係で、非常に大きな問題があるということが判明しました。

今回は、古い住民も新しい住民も含めて何かしら地域社会とのつながりを強化する、そういったテーマはないのか。沖縄で特に問題となっている自治におけるテーマは何かといたら、おそらく議員・議会の分野と、それから、やはりこの地域再生の分野だろうと。この2つが一番問題だと思います。特に、地域の問題の中で地域と学校教育との関わりについて、これも大きな問題であると考えます。

地域と学校との協力関係に取り組んでいる沖縄の先例として、沖縄自治研究会メンバーである新垣光栄さんから中城村立津覇小学校の事例を紹介していただきました。とても素晴らしい事例だと思います。特に、毎週水曜日に開催する地域連絡会ですね。地域の課題を出し合う会になっているようです。学校教育においても重要なんですが、地域同士のつながりとか問題の共有に非常に役立つと思います。この地域連絡会をもうちょっと強化していけば、そのまま「学校運営協議会」や「地域運営学校（コミュニティ・スクール）」の母体になるんじゃないか、というところまで想像ができます。津覇小学校の取り組みと、それから地域にとってこれがどんな意味があって、どんな地域の再生につながったのかをお話していただければと思います。

それでは最初に、宮城先生のほうから津覇小学校の事例について、きっかけや経緯などお話をいただけますか？

宮 城：はい。できる限りお話はしますが、最初私が赴任したときには、その流れはできていて、活性化するというか、それを普及させるのが私の役割だったかな、と考えております。

それ以外にも、この趣旨にはつながると思いますから、その事例を話してもいいですか？地域と学校のつながりという概要から、学校長としての立場から、どういう取り組みがあって、今どういう状況にあるというところまで、私が関わりました2カ年間について初めにお話します。

まず、中頭教育事務所は99小学校あるんですが、とにかく中頭地区の小学校は本県では多い学校数を有しています。その中で、校長研究会というのは、校長・教頭・教務主任まで同じテーマでそれぞれ、校長としてのビジョン、教頭としての運営計画、教務主任は実施ということで、三役職がつながって学校経営にあたる、という流れになっております。

昨年度と今年度のテーマが実は、今日私たちがこの場に集まったテーマそのものなんです。視点は、「学校教育」。学校の教育目標達成というのが、私たちの仕事です。学校・家庭・地域の教育力を最大限に発揮した信頼される学校づくりの推進。今年度のテーマはそのパート2となっています。つまり、前年度は「地域と学校がどう関わってきましたか？その計画、構想を述べなさい」というようなテーマだったんですが、去年の構想を1カ年間実施してきて、「家庭や地域の教育力をどの程度達成できましたか？どの程度学校教育に取り込むことができましたか？」その検証というのが今年度なんです。まさに、今、家庭・地域の教育力を学校が活用することによって、取り込むことによって、地域の教育力を活かそうということです。

地域には多くの人材がいます。しかもこの人材たちは、とても元気です。この方々が過去に経験されたモノを活用できる。人的財産ですね。そして、現役の方々がいますよね。P。外部。その方たちは、引き継ぎ活動させることで、学校教育に貢献、つながりができるんじゃないかな、というように私は考えています。

そこで、なぜ、家庭・地域の活用力が求められているかというと、教育基本法、学校教育法、

教育施行規則も含めて、家庭・地域の人材を活用、子どもの実態、そして地域の状況に応じて活用するというのが今回4月から新学習指導要領が描く法規改定によって全面実施されました。その学習指導要領の中でも、家庭地域の活用、学校教育への活用が明文化されているんですね。

それでこのようなテーマで私たちは力を入れている状態です。去年からのテーマの引き続きとなり、去年は私にとって地域の力を最大限に活用するということに力を注ぐことができたのではないかと考えております。

その根底にあったのは、先ほどの毎週水曜日に開催する集まりです。地域の代表者というのかな、つながっているメンバーが参加されます。このメンバーに関しての話は、もう既にお聞きですか？

新垣：概要だけお願いします。

宮城：はい。メンバーは、村議会議員の新垣光栄さん・仲座勇さん、津覇駐在員、ときどき老人会、老人会長とPTA会長。常時、出席なさっているのはこの方々です。たまに学習支援員で一人でいらっしゃる方で同じ村内のPTA会長だった方が、通りかかっている方とはとにかく中に入れます。気軽にお話の仲間に入ってもらおうというような関わりで、できるだけ固定化せずに、雰囲気を作ろうということです。他にも「トトロの会」の方々です。とにかく学校にその時間帯にいらっしゃる方はどうぞということで参加していただいています。気軽に入れるような雰囲気作りをしたかなと思っています。

その中で話は、やはり、教頭・校長が学校内で勤めていて、地域でどういうことが起こっていて、どういう子どもたちの動きがあるというのを、このメンバーの中から得ることができるということです。今地域で起こっている問題、例えば、南上原の地域、今年の夏から新しい新設校の準備が進められていますが、その工事がどういう進捗状況で、修正するところはあるところですか、細かく情報を得ることによって、教頭は計画委員会、新設校を準備するための委員会、その中に校舎の図面の検討とか新設校作りに関わる委員会に情報を届けることができるのです。この集まりがなかったら、地域の情報は学校にあまり伝わってきません。地域にいる子どもたちの様子の情報が入ってきません。そしてさらに、地域の文化財に関しても、色々な情報が入ってきます。人はわざわざ歩かないと、また自分で動かないと情報が得られませんが、津覇小学校の場合は、学校に情報が飛び込んでくるシステムです。今、思えばですよ。週1回の集まりは、それだったかなと考えます。

そして、校内で起こっている課題。地域の方々に相談したいなという課題も、その方々に通すことによって、ある程度、理解が得られます。例えば、ある^{ちやうど}字で、小学校六年生の子が登校しぼり、夜遅くまで遊んでいるなど、そういうような各家庭の状況もこの方々は知っています。小さいときからこの子に関しては知っている。この子の家庭環境とかそういう子どもを見守るという流れを作ってもらったり、助けてもらったかなと思います。活用して学校教育に生かす、とっても大きな力になってもらい、感謝しています。

それから、このメンバーの駐在員の方に関しては、夏休み前の一学期の終業式に、巡回パトロールもお願いします。また、終業式直後に駐在さんによるミニ講話もあります。夏休みの安全な過ごし方や、自転車の安全な乗り方、国道・歩道橋の渡り方などの内容です。担任が安全

指導の中で言うてはいますが、おまわりさんという専門的な方に直接子どもに話してもらうと、安全指導が強化できます。また、それ以外にも万引き防止。本校は、下地区で言うと南上原以外の字が7つ。通称、上地区と言っているのが南上原この地区ですね。その上地区には、コンビニが多いです。やはり、万引きなどが起こりやすい環境にある。しかも、これはとてもとても大きな出来事なんですね。そういう子とも関わったことがあります。その時もやはり、おまわりさんに万引き防止の話をしてもらうということがありました。

それからもっとありましたね。例えば四年生の学習活動の中で、中城城跡の見学があるんですが、誰かいないか探す前に、私たちは新垣さんが「グスクの会」のメンバーであるというのを既に知っていますので、その週1回の話の中で新垣さんとスケジュール調整をして活用したりしました。

それからもう1つ。今、発達障がいの子が、以前よりも目に付きます。その発達障がいの子に関して、多くの市町村では、学習指導員という方を賃金を予算化して各学校に2名とか配置しています。中城村の場合も、2名配置されています。しかし、その2名の配置ではおぼつかない。そこで、社会福祉協議会で発達障がいに関する支援員を養成しています。その支援員は、無償で、純然たるボランティアという形です。学校の要請で、子どもたちの支援をしてもらっています。去年は、津覇小学校では8名の方に来ていただきました。普段、職業を持っている、介護職をしているという方などです。とても忙しい中、スケジュールに合えばその支援員の方々に入ってもらっています。この支援員の方々もやはり地域の方、村内の方なんですね。津覇小学校区の方がほとんどです。そういう支援のおかげで、とても授業がスムーズになっています。活用した担任からは、「また次年度も活用したい」ということがありました。

島 袋：これは、「トトロの会」ですか？

宮 城：はい、そうです。

島 袋：この8人が「トトロの会」というグループになっているんですか？

宮 城：8名ではないですね。それは、社協さんの方で、18名くらいです。

新 垣：18名から20名くらいです。

宮 城：18名から20名くらいの方が講座に通われて発達障がいについて理解をしていただき、派遣してもらっているの、ある意味では安心してお願いできます。そういうシステムがありまして、それでとても助かりました。

ここに、去年、校長研修会でまとめた資料があります。その中では、学校での人材活用に関して3つに分けています。「教室での活用」「学校外での活用」「校庭及び運動場」です。

「教室での活用」に関しては、先ほどの「トトロの会」に学習支援してもらっていますね。

そして三年生のそろばんは、保護者に珠算教室の方がいらっしゃいますので、指導してもらっています。教師よりもプロに教えてもらったほうが、子どもの学習効果がより高まるということで、保護者の一人である方に相談して、三年生の指導をしていただきました。

さらに、読み聞かせサークル「てぶくろ」というのがありまして、PTAのメンバーの方で、これは学校教育計画に位置づけての活用です。各学級単位で木曜日に実施しています。年に2回は、大型紙芝居または大型スクリーンを使つての全校児童を対象とした一斉読み聞かせを、朝の会の15分間でやってもらっています。

そして「地域子ども会」というのが7月にあります。地域各字の子ども会担当者が学校にいらっしやって、各字ごとに子どもたちに集まってもらい、夏休みの過ごし方に関して説明してもらいます。朝のラジオ体操から地域で予定されているビーチパーティやその他行事、地域子ども会の行事の説明などです。そうすると、そこには地域の小学校一年生から六年生までの子どもたちが1箇所集まりますから、教師は何をするかという、その中で子どもたちの掌握ですね。学校では、各字担当教師を始めに校務分掌の中に位置づけています。そうすることによって、地域教育懇談会もその割り当てで全員地域に関わっていっています。

島 袋：各字2人ずつですか？

宮 城：2人または3人です。教師全員8区字に割り当てます。

大宜見：西原町でも同じですか？

宮 城：はい、そうです。宜野湾でもそうです。

少し話がずれるんですが、形骸化はなきにしもあらずです。行事化しています。夏休み前の地域で過ごす子どもたちの指導のために、地域教育懇談会というのもこれも行事に位置づけられていますね。その運営の仕方も課題があります。つまり、学校職員は集まるけど、現役の方（今、わが子を育てている方）の集まりが少ないです。そこで、子育てを終わった老人会の地域が好きな方々が集まります。地域をどうにかしなければならない、という思いを持った方々が集まるのですが、学校職員からは、どうにかしてくれ、と。集まりのねらいは、学校の子どもの様子を届けに行っているのに、学校の伝える相手が数人しかいないのです。また、教師が自分たちで資料作ったのに、自分たちへ向けて読むみたいなのが多々あります。

地域の教育力というのはありますが、津覇校区に関してはいいほうだと思います。津覇の子たちは、心優しい子が多いです。津覇校区のコミュニティ力がまだ残っています。まだ隣近所、お互いを分かっている。子どもの名前を分かっている。道を歩いていても、どこのお家の子ともというのが分かっている。それがまだ残っているから、津覇の子たちは優しいです。人の子に対しては思いやりがあるし、上の子に対しては、まだ「ねえねえ、にいにい」という、そういう気持ちが残っています。これは、近くにおじいちゃん、おばあちゃんが同居しているというのが、その子たちが育っている大きな空気じゃないかなと考えています。ですから、幼稚園の保護者会の中でも園長としては、「おじいちゃん、おばあちゃんたちも大事にしてくださいよ」と言っています。おじいちゃん、おばあちゃんは、見えないところで子どもたちの心を育てています。

でも、津覇地域も危ないですよ！今の状況が続いている限りは子どもたちの心もよく育つと思います。しかし、それは努力しないと続けることができないものです。このような座談会も努力の一貫だと思います。ですから今、人と人がつながるとというのがとても重要だと思います。これは、色々な子どもたちの問題行動もそこに派生しているんじゃないかなと私は捉えています。

次に、校庭及び運動場での地域の活動という、どの学校もやっているPTA作業ですね。土作りや運動会のPの方々の協力、それなしではできません。津覇小学校の運動会の特色として、字対抗リレーというのがあります。この字対抗リレーは、人数の関係で、純粋に同じ字だけの児童のメンバーではできない状況になっていたため、「やめましょう！」ということがPTAの

委員会の中で出たんです。しかし、私はこれに2カ年間反対してきました。なぜなら、地域のおじいちゃん、おばあちゃんたちは運動会に何で盛り上がるかという、この字対抗リレーなんですね。わが孫が運動会に出ていなくても、字対抗リレーというのは、おじいちゃん、おばあちゃんにとっては、魅力なんです。ですから、隣の字から借りてでも続ける、ということをしてでも、この字対抗リレーは、地域と学校をつなぐ大きなものの1つだと思いますので、続く限りは続けましょうよ、ということで納得してもらって続いています。これは、運動会における地域の1つの関わりかなと思っています。

次に、先ほどもありました「グスクの会」。「グスクの会」というのは、地域のボランティアグループです。他市町村の方もメンバーにいます。中城城跡や村内の史跡の案内、これも学校の四年生ということでしたが、教職員も活用するということで去年、校内研修の中に入れました。村内の文化財を案内してもらいお世話になりました。

それから、保護者の朝の挨拶、安全指導です。これもPの庶務の方が組んでいます。津覇小学校に来て感心したのは、毎日保護者が来ない日はないということです。保護者は学校に何らかの協力はしたいという気持ちがあるということなんだと感じています。

それと、地域のコミュニティ力がまだあるんだと思います。ある意味、強制的な力。地域が地域のために、学校のために、何かやらないといけないという気持ちを持ち続けるということはとても大切だと思います。子どもの問題行動や犯罪が発生しないというのは、地域の人がこの子どもを知っているというのは大きいと思います。抑止力として、地域の人がこの子どもを知っているということは大きいです。目に見えない力だと思っています。大人にしても学校に協力しない、地域に協力しないというのは、ある意味、地域の人がよく知っている、知り合っている力があるんじゃないかな、と。それがまだ残っている地域なんですね。

そしてPTAの奉仕作業の津覇小学校の特色としては、お父さんの参加が多いということです。お母さんも多いんですけど、お父さんの多さに違いがあるかなと感じました。本部町の上本部にも以前赴任していましたが、上本部の方もお父さん方のPTA参加が多かったです。それと地域の教育力がどう結びつくかは分からないんですが、とにかくお父さんの労働提供が多い。作業に関してはお母さん方よりもそれが多いいですね。

次に老人会の朝の挨拶。これもとても力になっています。

あとは、五年生の宿泊学習の行事でもその保護者の方が夜、大勢参加してくださって、とても協力、支援してもらっています。

大宜見：どちらに宿泊するんですか？

宮 城：石川少年自然の家です。そこにお母さん方、お父さん方が参加してナイトウォークラリーの支援をしてもらっています。帰りはドライブ感覚で帰っていくから楽しんでいるかな、と思っています。それが一番いいんだと思います。負担感がなく。

まとめに入ります。学校というのは、ずいぶん前から教師が子どもに伝えるという学習というのは限界にきています。つまり、あまりにも社会が多様化しすぎて、教師の持っている学んできた財産だけでは限界があるんです。私は学校長として、先生方には伝えています。

学校は開かれた学校といわれて久しいですが、まだ教師にとっては、本音を言うと、自分の授業を見られたくないという意識があるのは確かです。しかし、それを取り去っていくのは校

長としての役目だと言った場合に、教師が持ち合わせていないものを地域、家庭の人たちに求めるのは当たり前のことです。

しかし、授業を組み立て、自分の学習のねらいの意図するものにどう効果的に使うかというのは、教師の仕事。お願いした場合に、この方は授業の流れの1つとして使う。何の打ち合わせもなしに一時間お任せではいけないと思います。そして、例えば「トトロの会」の方に私がお話ししたのは、「教師を見るんではない。子どもを見て欲しい」ということです。教師のウィークポイントを指摘されると、子どもの学習支援という本来の目的がもう成立しません。開こうとしている学校に教師批判があると一番いけないと思います。担任が一番それを恐れますから、教師を批判するというのは、開こうとする気持ちをまた閉じてしまうことにつながります。だから、「何も言わない支援もありますよ」と言っています。教師以外にも目があるということは、子どもはピシッとします。無理して子どもぶるんではない。そういうのは、校長としてスタートの時、支援者へ伝えています。

新垣：これですね。「トトロの会」でも、校長先生の「後ろで立っているだけで支援ですよ」というのが、合言葉になっています。これによって気軽に参加できます。

宮城：「何かしないといけない、何かしないといけない」と思ってやってしまうと、子どものためにやってるのにストレスを作ってしまいます。その方々にも必要な支援・賢い支援をしてもらう。そしたら、長続きします。学校長としては、地域に、自分の学習が高められたという結果に終わらないといけません。外部の人材を活用するときには気をつけています。

それで、今、学校教育は外部人材なしでは機能しないんですよ。教師の力だけでは子どもの家庭、保護者のニーズに応じることはできません。ですから、「学校外の人材を活用しましょうね。活用するようにと、各種法令で謳われているのです」ということは、学校職員には話をしながら、理解を進めています。これは、私の学校長としての使命だと思っています。

ということで、学校では人材リストというものを作成しています。前年度使わなかった人材に関しては、また再度、人選していくということです。今現在100人程度登録されていますが、前年度いた職員に尋ねてみると「分からない」と言う。だから今、実効性のあるリストを教頭に作成させている状態です。

そういうことで、年々、地域の教育力が落ちていくと、学校の負担が大きくなっていくんじゃないかなと、私はとてもとても思っています。

島袋：どうも、ありがとうございます。続けて、仲座さんお願いします。

仲座：昔といいますかね、下の道路は、我々高校の時分までなかったんですよ。つまり、東京オリンピックの3年か4年くらいはなかったんですよ。人口も琉球大学がくるまでは800世帯くらいでした。現在は、学生も多いですから世帯数で3000世帯4200人くらいです。しかし、自治会に入っているのは約400世帯くらいしかない。旧世帯はほとんど入っていますが、アパートの方々はほとんど入っていないです。今の自治会長が4年、その前の自治会長は15年です。うちの旧部落はPTAの役員も多いです。

2カ年あとには本校もできます。地元ではこの分校のことを分校とは言わないんですよ。地元では「わった一学校」だというのが強くて。その流れも若干あるんじゃないかと思います。

また、琉球大学付属小中学校の場所が中城です。自治会に入っていなくても自治会行事に関

係するものは村あげて、学校あげて、お祝い事も必ず地域あげてやっています。毎年、小中学校の新入生歓迎会もやっていますが、それは自治会関係なく、校長をお招きして、地域と一体となって、やっているつもりです。

また、防犯や交通安全指導は、付属小中学校とも提携して結構活発にやっています。班で毎週、夜間パトロールなんかもやったりしますね。月に1回は合同でやっています。

除草作業ですが、さっき予算説明がありましたが、年に1回くらいしか草刈の予算はないですね。そうすると、子どもたちが見えないくらいの草が茂ってね。普段気がつかないですよ。歩道のガードレールの決壊といいますか、事故を生んだりするんで、そういうのが危ないということで、私が訴えましてですね。去年9月でしたか、中城の予算からすると国からは200万くらいしか予算がないんですが、このガードレールに1200万の予算押してくださった。これは、各議員も逆にお礼言いました。

そういった中で、自分たちも地元で生まれて仲座青年会OBとして色々できることはやりたい立場ですが、やっぱりその結果的に地域の連帯といいますか。旗揚げ役の校長が中心になって、一番その人の人間性とか努力する姿勢というのが見えないと上手くいかないんじゃないかと思います。それが歴史になって後に残っていくということも感じています。あとは後任の方々、駐在も含めて、ある程度のプレッシャーになっているんじゃないかと思います。また気が合った人たちとの活動は、とても楽しいんですよ。逆に何かあって行けなくなってくると、心残りなんですよ。こういう楽しい場を作ってくれたのも宮城先生のおかげですよ。2ヵ年でしたが津覇小学校のPTAにも継続するようにお願いしました。

東日本の大震災のこともあって、この前も新垣さんとも話をしましたが、小学校に災害に対する提案をさせてもらっています。学校単位で対応しようと。総合運動公園の近くに120名の保育園があるんですが、役場まで1時間かかります。この時点でアウトだと思います。それも含めて、早めに対策しようやと。行政にも、学校の状況、あるいは駐在所から。区域外も管轄も含めて。とても勉強になりますしね。我々の対応も。また最近の保育園の方々は、直接の子どもに対しての関心はすごいが、それ以外のことに限っては、なるようにしかならないんじゃないかと。あるいは、行政のやることはある程度仕方ないんじゃないかというのがあって。なかなか関心引くのは時間がかかるんじゃないかと思っています。

また、今4200人ですが、しばらくすると約倍になるんじゃないかと思います。それも含めて、時間が追いつかないくらい進んでいますので。また、下地区では、過疎化なるんじゃないかという心配もあります。難しいところがありますが、また一緒に頑張りたいと思います。

島 袋：それでは、お二人に質問をしていきたいと思います。

宮城先生に、調査項目の5番目ですが、どのような地域どのような自治会のある地域で、このような関わりは作れると思いますか？作れないところはあるのでしょうか？津覇小学校のように地域と上手くいっている連携は、どのような状況ならできるのか。地域社会の条件がもし違えば、できないのか。例えば、津覇小学校の地域的・社会的条件だからこそできたのか。他ではできないのか。それともそういうのは関係なくできるのでしょうか？

宮 城：関係なくはないと思います。やはり動かせないものはあるかなと思います。つまり、前からこの地域に住んでいる方々の地域づくりにまさしく私は飛び込んできた。偶然ですよ。たまたま

ですね。119 年目から赴任して、120 周年行事に関わったんです。

周年行事というのは、結束力を高める大きな力だったんじゃないかなと思います。つまり地域の人が一斉に動くわけですよ。各字の方が地域で一斉に動くということを体験できたんです。平成 22 年度ですが、やはり周年行事は、学校のためでもあります、もちろん。それに派生する効果というのが大きかったんじゃないかと思います。津覇小学校で経験した大変さを活かしながら、期成会を作りたいと思っています。

島 袋：西原小学校ではできそうですか？

宮 城：私はとても恵まれていまして、西原小学校も津覇小学校と似ているんですね。周りの地域の雰囲気似ています。寄留民が一部。よく私のほうに、「先生、僕のこと知ってるか？」と聞きに来ます。つまり、私は平成元年から 5 年まで小学校のスタートは西原小学校だったんです。そのときの子どもたちが 30 歳を過ぎて、その子どもたちの子どもが今、西原小学校に通っているんです。でも、「先生、僕のこと覚えているか？」と言われても私は分からないんです。(笑) 私はゆるやかな変化、しかし、当時小学生だった子どもたちは現在お父さんになっているから、すごい変化なんですね。ひげ生えてないときに会って、もう子どもまでいるとなると、「ごめん。誰だった？」という感じなんです。(笑)

そして、一年生が入学して 1 ヶ月以上過ぎていますが、その一年生の下校風景を見ると、津覇小学校に似ています。おじいちゃん、おばあちゃんのお迎えが多いんです。ということは、おじいちゃん、おばあちゃんが近くにいる、一緒に住んでいるということです。おじいちゃん、おばあちゃんの影響というのは大きいと思います。西原小学校に一度いらしてみてください！

また私、自慢していますか？津覇小学校にいたときは、津覇小自慢でしたが、津覇小学校を出たら西原小自慢ですよ。(笑)

それから、西原小学校でも笑顔でいい言葉かけ、いい心かけをしようということで、「エココ」と言っていますが、それを実施しようとしたんですが、なんのなんの。挨拶が素晴らしいです。「授業中は挨拶なくていいからね」と言っている状態です。

ですから、私は恵まれています。こういうふうに、心が開放されている子どもが多いのです。

先ほどの質問ですが、他のコミュニティ力の弱い学校に行った場合は、違う関わり方があるのかなと思いますが、ある程度素地ができている地域に私は校長職になっていますから、恵まれていると思います。ですから、その力を弱めないような手はずを学校を中心としてやっていきたいな、と思っています。

それから、津覇の地域の方がいらっしゃいますのでお聞きしたいんですが、今度の新校長から、「南上原から新入生歓迎の案内が来ているんだけど、校長先生行きました？」という相談があったんです。というのは、他の自治会からきてないと。もしかしたら、ないのですか？

新 垣：あります。

宮 城：それ、送ったほうがいいと思います。つまり、校長は南上原だけ行って、他の字には行かなくていいのかな、他の字からはないのに南上原だけ行っていいのかな、というので。

新 垣：わかりました。

このように連絡がくればすぐに実行できるんです！

弱まっていく地域力を再生させてもらったかなと、とても感謝しています。

これから南上原の分校が本校になるんですけど、そしたら都市化した地域の学校ですよね。急激に都市化する中で地域力作りを学校ができないかなと。

島 袋：これは僕も質問したかったところなんですけど、よく学校教育のために地域の資源を活用するという問題設定があるんですけど、逆に地域にとっては学校も地域力再生の資源であって、学校の課題を解決するために色々取り組むんですけど、実を言うと、地域の問題を解決する資源として学校を考えるとという発想の仕方もあるわけですよね。それで、考えてみたらコミュニティが残っているということではなくて、残すために、学校が意図的に努力をしているとおっしゃって、学校の側も、地域再生のための資源の1つとして学校の行事を位置づけて地域のコミュニティ力を強化するという意図があるから、字対抗リレーを残すとか。まさしく、地域の再生のために、学校側が何かしら貢献できるし、しなければならないという発想ですよね。だけど、地域担当教員という役割があるというのは知らなかったです。

宮 城：「地域連携担当」と言います。

島 袋：地域教育懇談会もそういった使命感を校長先生だけではなくて、担当教員も持たないと、何のために地域に入ったのか理解できない。役割も分からないんじゃないかという気がして、それで地域との関わりの中で思ったのが、学校の一人ひとりの先生が地域の資源、地域の方々を活用して授業を組み立てないといけないということだったんですけど、その効果が自分で分かれば、その地域の方々との連携が上手くいくというのが実感できるようになって、ちょうどwin-win 関係になっていいってことでしたけど。そういった、先生方も自分自身が地域とのつながりを作り直すんだという、宮城先生の発想のようなそういった意識まで本当はいかないと、地域連携教員もあるいは地域教育懇談会も、上手くできないんじゃないかなと思います。

津覇小学校の場合の各教員というのは、校長先生と同じような意識を持っていたのでしょうか？閉じている先生が多かったんですよね？それを開いて、さらに地域再生に私が貢献するんだという、そういった意識はないんですか？

宮 城：そういう意識は、個々の教師にあるかといえば、あまりないように思います。というか、日々授業に追われているんですね。外に目を向けるということはないと思います。

大宜見：びっくりしたのは、校長研究会で校長・教頭とつながって学校経営にあたるということ。さらに、地域の人材を活用するというのを研究テーマに入れたのはいつ頃ですか？

宮 城：学校・家庭・地域の教育力を最大限に活用した学校経営というのは、去年からです。しかし、その前から、その時代時代、その年度年度に応じたテーマが課題として出されています。そしてそのシステムは、私が教務主任時代からですから、平成4年か5年くらいからずっと続いている取り組みです。

大宜見：その時期、教務主任であった方々が今校長職に就いているんですか？

宮 城：そうですね。特に、この2カ年間、平成23年度までは同じテーマです。最初話しました同じテーマで検証というところまで各学校に課されたということは、とても重要なテーマなんだと思います。今、学校が置かれている重大なテーマなんだなと。2カ年間連続で同じテーマが課されたのは初めてです。

大宜見：コミュニティ・スクールなどの議論はありますか？

宮 城：それに関しては出てないですね。

前 城：冒頭の話の中でおっしゃった「目的を持って検証まで」は、PDCA サイクルが回っているということで、とても素晴らしいと思いました。また校長先生の話の中で、「先生を見るのではなく、子どもたちを見てください。」ということも共感しました。私たちも翔南小で学校の授業に入っていくという経験をしました。先生は授業のカリキュラムを作る際に最終到達点を掲げていて、それに向けて日々の授業にどのように取り組むかを考えていました。その中で私たち地域の力がどのように関わったらいいか、真剣に考えました。その関わり方を考えているうちに先生を応援しようという気持ちが持てました。それくらい授業づくりは大変なんだと解りました。

もう一つ、地域のつながりの話の中で、おじいちゃん、おばあちゃん存在が大切だということもありました。このような地域の力が子どもの成長を見守っている。しかし、この地域の力というもの、そこに住んでいる方々が、努力して学校を育てるという意識を持ち続けられない。コミュニティの弱いところはそのような意識を持った方々が少ないように思えます。先生は、そのようなコミュニティの弱い地域へ赴任された経験はありますか？

宮 城：宜野湾では教頭を3年間務めました。やはり、多様な保護者が多いと言いますか、多様な学校教育、多様な家庭環境の方々が多かったです。宜野湾の地域は、2つの字だったんですが、自治会加入率が30%切っている地域でした。そういうところでは、やはり有志というのが市議会議員、それから学校に勤められていたという方、校長職を退職して地域の中に一住民として関わっている老人の方々、つまりリタイア組です。元保護者だけど現在はわが子はいませんという、そういうリタイアされた方々が地域を支えていました。本当に一部ですね。

そういうところで、やはり問題行動というのは多いわけです。毎日、日々の火消しに追われていたというか、それが大きかったかなと。教頭職でイスに職員室に腰かけたことなかったです。大体、民生委員と一緒に、子どもの家庭を訪ねて、居場所確認。それで午前中終わります。午後からは、事務処理をする。でも、また保護者からクレームがくる。それでクレーム対応。呼ばれて行ったら地域のアパートの住民でしたが、この子たちがアパートの廊下を走ると言う。放課後ですよ。隣近所の子だから注意すればいいんですよ。だけど、自分たちでやらずに、学校を呼ぶわけです。そしたら教頭は走っていくわけです、謝りに。そして、その子たちの指導にあたる。それで、ついでにお土産までもらってくるんですよ。どんなお土産かと言うと、「教頭先生、この子たちの親見てくださいよ！毎日パトカーきてから、毎晩酒飲んで、毎日睡眠邪魔されているんですよ。うちの主人、今、眠っているんですが、もう！」って、子どもたちの前で続くんですね。「すみません、子どもたちも謝っているもんですから、今日のところは失礼させていただきますね」と言う、「教頭先生、逃げるんですか！」と言ってきたり。まあ、とてもとても大変な日々で、家庭訪問しない日はないくらいでした。そういうことを児童委員、民生委員と力を合わせて情報も交換しながらやってきて、「さあ、これから仕事ができるな」と思ったのが夕方5時、6時。家に帰るのは夜10時。もう、家に帰るというよりは、家に行く、学校に帰る、というような教頭時代3年間でした。

土日で仕事を処理するということもしていたので、津覇小学校に来たら問題は何のことはない。ですから、「電話対応ではなくて、校長室にいつでもいらして話してもらえると助かるんですが」というような対応の仕方をするとうまくいきました。だから、地域とのつながり方の質が違っていただかなと思うんです。

島 袋：地域社会とのつながり合い、自治会が強いとか地域の連帯が強いとか加入率が高いとか、もしかしたらそういった地域では、クレーマーが出にくいのかな、という気がしています。クレーマーの人たちというのは、新住民、あるいは地域とつながっていない人、地域のつながりを自分で作るんだという意識のない人がクレーマーになっていくのかなという気がしています。今の話のイメージですよ。

宮 城：言えない。言う相手が隣近所にいない。例えば、隣近所に、または家族におじいちゃん、おばあちゃんがいたら仲良く何でも話せる。井戸端会議ができるような雰囲気があったら、学校にぶつける前に地域で吸い取っていたと考えられるんですね。

島 袋：クレーマーのような新しい方々、つながり合いの弱い方々がサポーターになるには、つながり合いが、自分で関わっているということが、実感できるようなものがあればいいですね。

仲座さんに聞きたいのですが、クレーマーだった人がサポーターになったとか具体的な事例はありますか？学校の事例で。

仲 座：そういうクレーマーというのは、周囲になじめない人が多いんですよ。孤独感があってですね。逆に本人が遠ざけていくんです。さっきもあつたんですが、たまたま友達が、父兄が、近くにいたから助かっている。本当に恵まれてるなあと、これはずっと感謝しています。ですから、こういう仲間の組織は、コミュニティの交流が一番大事だと思いますね。

宮 城：この件に関しては、新垣さんがよく分かるんじゃないですか？ほら、PTA の運営委員会で混乱させたけど、とっても強い協力者。

新 垣：コミュニティに入ってくることによって、自分の発言、気持ちが分かってもらえる。私は自治会に入れないうんだけど、学校を通して、子どもが仲介することによって、自治会に入ってくるケース。自分の子どもを通して、この人たちが自治会に戻ったときに、最大の効果が現れてくる。こういったことが、都市化した地域の再生に大きく役立ってくる協力者が育ってくるんじゃないかな。

島 袋：具体的に誰がいるんですか？

新 垣：20 年くらい前になるんですが、この和宇慶地区^{わうけい}というのは、相当荒れていました。これをどうにかしようということだったんです。地域のコミュニティはあるんですが、学校に無関心なんです。その中で、よそ者というか、よそから中城にきた人というのは地域の素晴らしさというのがよく見えるんですよ。その方々が頑張って、太鼓会を作った。太鼓が子どもたちを良くしたんじゃないくて、太鼓の活動を通して地域が良くなった。もう 20 年くらい続いています。この活動が和宇慶地区を跳び越して、村中の子どもたちの関わり、地域に大きく貢献している。ですから、よそ者が入ってくることによって、この地域のよさも再認識できる。

島 袋：さっきの PTA を混乱させた人は、何がきっかけですか？

宮 城：先ほどの宇対抗リレーで、話し合いの中で色々反対意見をいっぱい言ってくるんです。でも、その反対意見は地域の人たちはわりとレッテル貼っていますよね。いつも何か PTA で案を出したら反対するよね、という情報が入っていたんです、私のほうには。やはり PTA 会長も分かっている。地域の方ですから、地域で行事開こうとしたら、必ずこの方が反対意見を出すと。また今年も、対抗リレー反対するはずよ、というのがあつたんですね。で、この方が言ったときに、もちろんこの方の言い分も聞く。聞いて、どのような条件が整ったら同意してもらえます

かというようなことを言ったら、隣の字から借りるという案について、これはオッケーです。次は、場内アナウンスで、「この地区は、どここのメンバーを借りました」ということをアナウンスする。このような色々な条件をオッケーですと言うと、やはり好評なんですよ。イメージ通り。そしたら、この方は、だんだんだんだん自分の言っていること、主張していることを学校は聞いてくれる。そしたら、少しずつ、今では地域運動も率先してやってくれます。今は強い協力者です。

佐 藤：問題は、そういう方よりも全然関わり持たない人たち。

宮 城：ですよ。言ってくるということは、こちらも対応の仕方が、動きが見える。

新 垣：和宇慶の自治会の中にも、一切子ども会・地域活動に関わってこなかった家庭があるんですよ。

何回お願いしに行ってもだめという家庭ですが、自分の子ども、孫が参加するようになると地域に出てきます。今まで参加しない皆さんが地域に関わるといいですね。

地域と学校との再生のためには、子どもが必要です。ですから、少子化が一番地域を壊しているんだと思います。

佐 藤：学校と家庭の地域の連携ということが、重ねて繰り返してテーマになっているというお話があったんですけど、今これを守る努力をしていかないと、それが消えてしまうという危機感があるというふうに理解してよろしいでしょうか？

それから、まだそれがあって、守ることができる、津覇小学校だったり、西原小学校の地域の話と、先ほどお話されていた宜野湾の例。取り組みの方法も違うと思うんですよ。先生が宜野湾に赴任されていた時は、そんなことはなかったという話があったので、中頭の中で都市化してしまっていて地域がばらばらになっているところでの、校長先生なり、教頭先生なりの学校での知恵の出し合いみたいなことや、どうやって地域と学校をつなげることができるのかなど、そういう情報交換みたいなことはあるんでしょうか？

アパートに居住している人たちは分断されてしまって、隣同士が誰かも知らないだろうし、そういうところが宜野湾にはいっぱいある。この人たちが地域活動をするときに乗り越えるハードルってとっても高いわけじゃないですか。それと学校の状況をおっしゃっていただいたんですが、多分、今、一番大変なのはそういう学校、そういう地域がどう再生するのかって、そこが一番大変なのかなと思っていて、何か共通の教育事務所の中での取り組みはあるんでしょうか？

宮 城：報告書5月に提出して、6月にまず校長研修会。一日それについて協議します。次、7月、教頭。8月、教務主任。ということで同じテーマでそれぞれの立場から、7、8人のグループ協議をするんですね。1日中。その中で事例報告と、どのようにしたらという各校の実態に応じた取り組み事例。このような感じですね。へき地校もあれば大規模校もあって学校間で実態が違っている。そして地域の家庭、または住民の意識の違い。そこで統一するというのが難しいところがあって、同じ実態の情報は自分の地域に参考になれば修正していく。各校、自校の取り組みに、これだったら役に立てそうだという実践を取り入れるようにする。その中でどうすればというのは、ほとんど一人ひとりの意識、課題に応じて生かしていくということになっていますね。

大宜見：この報告書は公開されているんですか？

宮 城：一般への公開はないです。これは一部。120 部印刷して提出します。この研修会の時に配って、その前に研究の柱、討議の柱というのが示されまして、各項各々、自校の取り組み、柱に沿った内容を伝え合う、または質問し合うという。ちょうどこういうような流れになっています。で、午前が研修の柱 1、午後は研修の柱 2 ということになっています。

これは中頭教育事務所の取り組みであって、その他の地区で勤めていた時はなかったことです。しかし中頭の研修会は、報告書提出、またそれに基づいた各校の取り組みについて協議し合うという流れで、各事務所によって持ち方が違ってきます。これも中頭教育事務所の管内の各校の校長・教頭の恒例行事。取り組みとしては長いです。

太 田：今の中頭教育事務所さんの取り組みというのは、学校関係者のですか？

宮 城：先ほどお話ししましたように、校長、教頭、教務主任です。そして、各市町村の教育委員会の指導主事。

太 田：今の宜野湾の事例でいくと、学校が課題であるとしていることが、そういう話が地域まで届いていないのかなと。どこに問題の本質があって、その問題の本質をどうすれば解決できるのかということが、誰が責任をとってやることになるのかなと思って聞いていました。

宮 城：私は少なくとも学校が地域を活性化するというのは違うと思います。学校の仕事はあくまでも子どもを育てる。

大宜見：学校側は問題を把握しているじゃないですか。しかし、地域はそこまで分かっている。

宮 城：学校経営説明会というのがあり、学校は取り組みを公表しないといけません。

その中で、今、地域へお願いしたいこと、地域の中で、やはり学校の中で子どもたちの課題がありますよ。それは地域で担ってください。学校・家庭・地域の役割を明確にして話をしようと思っています。そうした場合に、学校、教師は子どもたちを授業でよくしていく。家庭は、早寝早起き朝ごはん。基本的な生活習慣ですよ。子どもをいい状態で、いい心で登校させてください。それが家庭の役割。そしてもう 1 つ、地域の役割は、いい空気を作ってください。つまり、子どもたちが安心して歩ける、または安心して遊べる。そういうふうに過ごせる、そういう空気を作ってくださいと。

私には、10 分しか与えられていません。去年までこれは PTA 総会の中に組まれていませんでした。しかし大勢の人が集まるのはその時なんですね。1 年間の学校予定を見たらその時が一番のチャンス。見出しは学校長の挨拶となっていますが、挨拶の中で私は 10 分間プレゼンテーションし、地域での役割や概要を話します。その後、各種、PTA の運営委員会、役員会。または保護者が集まる場において、やはり地域の課題、地域に学校が求めていること。子どもたちを健全に育てるために、学校として皆さんお願いしますよ、と。

地域教育懇談会という場では言うことは同じですが、この様式で伝えても地域の方は分かってはくありません。この様式をそのまま発信はできませんよ。「なんね、これ？」と言いますよ。ですから、地域の方には地域に分かるような発信の仕方を工夫してやっています。

太 田：結局の話、すべてが学校の責任かよ、と。今のお話だって結局学校行事のようなイメージなんですけど。本当に、地域と学校あるいはその他役場とか教育委員会、それらが全部で、その子どもたちが地域とどう連動していくか、学校教育がおかしくなっている原因というのが、なんとなく漠然と皆分かっているんだけど、それを全て学校に押し付けちゃって学校が非常に苦労

しているんだと思います。それを本当に解決するのを待っている。なんなんですか、そういうのはないのか、と。それは教育事務所が主導してやるべきなのか、役場が主導してやるべきなのか、地域が主導してやるべきなのか、よく分かんなくて。それを解決する場として、「学校支援地域本部」をやろうとしているのか、いまいち、そこんところがいまいち。なんでかなあと
思うわけですよ。

島 袋：地域の問題で解決できそうなものを、全て学校の責任にして、学校で解決してくれみたいなど
ころでクレームがくる。本当は、地域において、地域は色んなことを責任を負わないといけな
くて、子どもの教育というのは地域の役割とか家庭の役割とかあって、本当は学校教育だけに
課せられた課題ではなくて、地域全体で考えなければならない課題であるにもかかわらず、み
んな学校の責任に押し付けていて。それで、地域の役割として地域の認識がなくなっている。
それを太田さんが言ったように、意識のレベルじゃなくて、組織としてどうやって再構成して、
責任を負うか。しかも多分、単独じゃないんじゃないかな、というのがイメージですね。教育
委員会と自治会とそれから役場と、これ全てがそれぞれできることを明確化して、自分たちで
責任を持って、学校だけの責任じゃなくて、教育は全体でやらないといけないんだというこ
とを再認識してから再構築できるかというのが課題かなという感じですね。

佐 藤：学校が地域を活性化させるというのは違うんじゃないかという話があって、学校というのは、
子どもを教えるところで、それが責任だって。これ、とっても大事な話であって、その中で地
域に働きかけないといけない部分が出てくるわけで、家庭がこういうことをやる、地域はこ
ういうことをという責任分担が本来あるはずです。ただ、その責任を果たせない、責任を感じて
いない家庭が多い。地域が責任を負っているということを課題を認識してない地域もたくさん
ある。その中で学校の責任を果たすためには、地域に働きかけざるを得ないというお話かと思
ったんですよね。だから、どこまでも責任を負わなければいけないのかというと、本当はそう
ではないわけです。地域のつながりがあるところは、学校が中心となって、地域の活性化、再
生化に対して、学校の責任、地域の責任というのが、ちゃんと取れる。でも、そうじゃないと
ころでは、結局学校の責任じゃないところまで学校は責任を負わされちゃっている。でも、地
域や家庭のところまで学校の責任ではないのは、当たり前のお話なんですよね。本来は、それが
学校の関わりとしての基本線のはずです。なんでも学校ができるわけではないという、そこは
認識しておかないといけない。

前 城：次回、翔南小学校の先生方をお呼びするのですが、翔南小の取り組みはどこから始まっている
かと申しますと、平成 17 年度の南風原町の総合計画策定時にさかのぼります。その際に住民参
加の会議体として「南風原町まちづくり住民会議」というのが設置され、その中に自治分権部
会と教育部会があり、そこに関わったメンバーが中心になって取り組みを展開しています。自
治分権部会では自治会加入率が大きなテーマとなり、現在の加入率 70%を今後維持することが
大切だと確認されました。また教育部会では、子どもたちを巻き込んでワークショップを行っ
た結果、安全・安心な地域づくりが大切だというテーマが浮かび上がりました。安全・安心な
まちづくりと自治会加入率は大きな関係があると、私たちは気づきました。そこで人と人をつ
なぎ大切な「場」として学校があるということにも気づき、PTA 活動を再認識し、地域再生に
向けて取り組みを始めました。いわゆる「安全・安心なまちづくり」という大きな目標を持っ

て地域住民として PTA 活動を展開したのです。もう 5 年目になります。この間いろいろな経験を積みましたので、今回の津覇小の事例を聞いても良く理解ができました。学校の中に地域の方々が入り、そこで子どもたちの役に立つことを経験できると、嬉しくなってさらに関わりが深まる、その人と人のつながりは地域活動にも好影響を与える。そのような相乗効果があると思います。話は変わりますが今回の研究で京都の御所南小学校も調査しますが、そこは都会でありながら地域ネットワークが素晴らしいところです。内容は後日の事例報告でお聞きいただきたいと思います。御所南もきちっと将来目標を掲げて地域ぐるみで取り組んでいます。そのような取り組みをする際、津覇小でも校長先生の真摯な取り組みがあったと認識しています。そのような役割は行政としては誰が担うのか、それはこれから先の課題として意見交換できればと思っています。

最後にサイレントマジョリティについてですが、翔南小は瓦版のような情報紙を頻繁に出しています。情報を常に流すという努力は大切だと考えています。これも今後の座談会につなげていきたいと思います。サイレントマジョリティの中にも、活動に関わりたいけれどなかなか時間がとれないという方もいらっしゃると思います。そのような気持ちを持っている方々も活動を裏で支えている大切な存在であるという認識も必要ではと考えています。

新 垣：私が一番良かったのは、子ども会ですよ。時間がないときは誰かが代わりにやる、俺がやる、責任がファジーというところが参加しやすい。

島 袋：逆に組織化されていない。

新 垣：「トトロの会」もそうなんですよ。休みたいときは休める。最初は、逃げ場を作ってあげないといけない。自分がやれる時にやるというのが、大切なんですよ。それがまた責任感につながって、なんとなく楽しくなっていく。

島 袋：沖縄自治研究会もそうですね。

仲 座：今の話に関連してですけど、うちの自治会でも今新垣さんがおっしゃったように、自分が参加しなかったら大変なことになると思って役員が決まるまでは参加しない人って結構多いんです。だから役員を多く作ったほうがいいですよ。倍くらい。俺が行かなくても運営できるんだと。そうすると、集まりがよくなってきます。休んでも気軽なんですよ。自分が行かないと回らないとなると続かない。また元気になって頑張りますからね。

島 袋：新しい方もいれないといけないですよ。

仲 座：でもこれは推薦しないといけないわけです。ただ手挙げてくれといたら誰もやってくれない。

大宜見：この話は、南風原のある自治会の綱引き用の綱を作るときに、今までは来なかった人は罰金制だったけど、それをやめたら逆に参加率がよくなったと。

仲 座：弊害もあるんですよ。前もって役員になる人、強い人が出てくる。これが問題点になったりするんです。メンバーが大事だと思います。中城は教育関係に関心がある人が多いですよ。

宮 城：多いですよ。

宮 里：今、分校ができるということを聞いて、子どもが増える分には都市部は、まだいいと思うんですけど。僕は上本部中学校の出身で、今度それが統廃合でなくなる。母校がなくなるというのは寂しいなともいもあるんですけど。多分、そうなると、地域のコミュニティはもっと衰退するんじゃないかなと思います。そうやってきたときに、学校というのは、地域の活性化の中心

になると思うんですけど、そうならない地域、過疎がどんどん進む地域というのは、非常に大変なところかなと思うんです。

宮城先生の中で学校というのは、どうしてもそういうのは止められないものだと思いますか？

宮 城：一番は財政がネックだと思います。財政で一校を維持するのに、校長・教頭その他教員も含めて、人件費・校舎維持費、プール、体育館。色々な物凄い維持費ですよ。児童数の割には、一番これが統廃合の主要因。それに伴う地域の問題。地域の方々は、学校をなくすというのは、すごい大きな財産をなくすという。地域の方々にとっては、学校という重みは生きていく上で大きな支えじゃないかな。人がつながるための中心が学校、そう考えてとても忍びないんですが、現実には先ほどのお金の問題。さらに、少人数だから、子どもたちはいっぱい学べるかというところではないところもあったり。

私の考えはですよ。子どもを教師や大人が育てるというのは、基礎的なしつけやマナーは育つけられ、生きる力というか、自分で考えて行動するということでは、お互い子ども同士、学び合うということが大きいんじゃないかなと思います。そうした場合に、一学級、2～3人の子どもだったら、「あれは算数でいきや〜」「あれは童話会代表」と決まってくるわけですね。切磋琢磨というところでは、守られはするはず。少人数ですから子どもに応じた学習、一方的な矢印のものね、そういうものは身につくと思います。人間同士の切磋琢磨や友達から学ぶこと、同じ同年齢の子たちから学び合うというのが、とっても大人になって重要な要素になるんですね。同じ年齢の色々なタイプの子ども、色々なタイプの人との接し方を学ぶというのは、とっても大きなこと。これが、欠如してるということですよ、過疎化というところでは。統合というと、そういう面ではいいところもあるけど、大きな損失もある。どちらとも言えないですね。

前 城：地域の人々と学校との連携。学校との関わりでコミュニティというのは、人によって、子どもがここにいる、というところがあるけれども、今みたいな沖縄の都市部の状況だと、地域の学校とは縁もゆかりもないけれども、何らかのそういう人たちは学校からは見えない。ある程度、あまりそこの学校とは関わりがない、たまたまそこに住んでるとかということで、なんらかの関わりを持ちたいという時の今の段階でどの程度なのか。

最終的には、ある程度関わりがあまりない人も入れた状態で地域を考えるのか、ある程度関わりがあるという中での地域との連携なのか。そういうことに関して、今の現状と将来的なことを。

宮 城：現状は、最初の段階の本校に関係ある、つながっていた、現在つながっている方々がメインですね。そしてその方たちから学校のニーズというか授業または学習、学校行事、そういうものに、こういうできる人が必要だなという時は、このメンバーを通して、つなげてもらう。それがいいかなと考えています。

前 城：例えば、市の広報とか、学校の中で、学校運営経営会というのもPTA総会とかで、ただ聞いてみたいというだけの人にもルートを作ったほうがいいのか、今の段階ではPTAだけでいいのか。

宮 城：理想としてはいい考えだと思います。ですから現実的には先ほどお話ししたように、目の前の人の伝を使ってといいますか。人とのつながりを広げるというのでは、一番いいかなと思います。

ます。だって、どこにこういう人がいるか知りませんよね。やっぱり、人とつながってそのつながりから分かるんであって。

島 袋：それでは、宮城さん、仲座さんありがとうございました。